

平成29年度第47回九州ブロック社会教育研究大会宮崎大会
全体会〈11月10日(金)〉
【パネルディスカッション】(全文)

1 テーマ

「人と人をつむぐ社会教育の創造」
～地域住民主体によるネットワークづくり～

2 登壇者

(1) コーディネーター

相戸 晴子 氏 (宮崎国際大学准教授)

(2) パネリスト

○ 社会教育分野

清國 祐二 氏 (香川大学生涯学習教育研究センター長)

○ 学校教育分野

竹内 一久 氏 (宮崎市立江南小学校校長)

○ 地域づくり分野

森山 喜代香 (宮崎県社会教育委員連絡協議会会長)

3 全文

相戸 パネルディスカッションの開始に先立ちまして、まず、テーマと趣旨について述べさせていただきます。テーマはこちらにも掲げられていますように「人と人をつむぐ社会教育の創造」～地域住民主体によるネットワークづくり～ということで、今回の大会の冊子の表紙にもあります研究大会全体のテーマと同じ内容でいかさせていただきます。近年、人口減少社会や少子高齢社会、子供の育ちのさまざまな問題や子育て困難に陥る家庭の問題、また地域の関係性の低下やIT社会の到来による弊害など、人と人が生きていくことに生きづらさを感じたり、孤立や疎外に陥るような課題が深刻さを増しています。このような時代状況から社会教育で取り扱う課題も非常に多様化し、深刻さが増しています。また、近年地震や台風、温暖化による自然災害があいつぐ時代になり、一人一人が命を守ったり生き抜いていく防災も

社会教育の重要なテーマとなってきました。こ

ういった状況から今回のテーマ「人と人をつむぐ社会教育の創造」のテーマは今まさに議論



すべきテーマではないかなと考えます。一方で、人と人をつむぐ社会教育で大切にしたいポイントは、今回サブテーマにあげられている「地域住民主体による」実践であるかどうか、もしくは社会教育としてそこを目指しているかどうかという点が大事ではないかと思えます。もはや現代社会の問題は、行政が社会教育を行う主体、住民は学習支援を受ける客体という関係構造では、現代社会の問題解決は難しい

と考えます。このパネルディスカッションでは、登壇者のみなさんに、そういった住民主体の社会教育実践を創造していくために、どういうことが求められているのか、また、これからの社会教育は誰がどのように担い、学習支援を行っていくことが必要なのかについて考えていきたいと思ひます。非常に大きなテーマですが、それぞれの登壇者のお話から、みなさんの地域に持って帰れるヒントを見つけていただければ幸いです。はるばる宮崎にお越しいただきましたので、このパネルディスカッションでは、宮崎ならではの社会教育も感じていただければと思ひます。限られた時間ではありますけれども、少しでも実りあるパネルディスカッションになるようコーディネートさせていただきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひします。早速ですけれども三人のパネリストの方に自己紹介から始めていただきたいと思ひます。それでは清國先生、お願ひします。

清國 みなさんよろしくお願ひいたします。香川大学の清國でございます。と言ひながら生まれは大分県です。国東市という大分空港のあるところですよ。実家の方は半農半漁でしたが、今では両親も後期高齢者ですので、引退して細々と百姓しながら暮らしています。18歳まで国東におりましたが、高校を卒業してから皆様方のお子さんやお孫さんと同じように外に出て、そのまま外に居ついてしまつて、この地方創生の時代に逆行するような行動をとつてるところでございます。研究領域は社会教育ですし、教育分野の中でも周辺的な社会教育でこうやって仕事をさせていただいております。自分にはあつています。なぜあつているのかというと、本当に地方の田舎で育ち、今消滅自治体とも言われている辺境を知つているからですよ。地域を維持するのは大変なことだというのは容易に想像できるわけですよ。地域づくりの要とならなければならぬ社会教育には、ぴったりだなと

思つているようなところですよ。現在、33ページにもございますが、いろんな役割を担わせていただいております。

我ながら、地方の視点で考えることができているのでは



ないかなと思つているようなところですよ。後ほど、話はしたいと思ひますが、冒頭ですので一言だけみなさんにお願ひを含めて話を紹介させていただきたいと思ひますが、社会教育委員の情報誌、社教情報というのがあります。社教情報の編集委員に10年ほど関わらせていただいて、またさらに今後も関わるようになってくると思ひます。前々回ですかね、タイトルに「社会教育と地方創生」について書きました。みなさんどうでしょうか、どちらが目的で、どちらがゴールで、どちらが手段だというふうに思われるでしょうか。私はあえて、そこでゴールを社会教育において、手段として地方創生を位置づけるような、そういう文章を書かせていただきました。そういったこともみなさんと一緒にこれから考えていきたいなと思つています。あまり長くなつてはいけませんので、自己紹介ということで最初のマイクは置かせていただきます。引き続きよろしくお願ひします。

相戸 竹内校長先生お願ひします。

竹内 おはようございます。紹介いただきました、江南小学校の校長をしております竹内と言ひます。実は教員生活が36年あるのですが、最初は小学校の教員をしており、残りの半分は行政の方におりました。そのうちの16年ほど社会教育行政の方に携わつておりました。今、学校現場におりますけれども、学校現場から見た地域のこと、社会教育の立場から見た学校の

こと、両方でいろいろお話をさせていただくことができるのかなと思っています。社会教育行政が長かったので、今、隣にいらっしゃる森山



会長とも長年お付き合いをさせていただいて、社会教育の全国大会や、九州大会も一緒にさせていただきました。それから相戸先生と清國先生も、昨年度から宮崎県が生涯学習実践研究交流会という大会を始めておりますが、私は、その実行委員をしており、相戸先生もその実行委員になっていらっしゃいます。去年は清國先生に分科会を1つ持っていただいて、ご発表していただきました。そういう知っている方がパネリストからコーディネーターでいらっしゃるの是非常に心強いところです。短い時間ですけども、今日はみなさんと一緒に有意義な濃い時間を過ごせたらよいと思っています。よろしくお願いいたします。

相戸 ありがとうございます。それでは、森山会長お願いします。

森山 私は紹介ありましたように、県の社会教育委員会議議長を仰せつかっております森山であります。私の住んでおります綾町は、この会場の宮崎から20キロ、車で30分のところにあります。後ろに九州山脈を控えて周囲を山に囲まれた盆地に集落がある人口7300人の小さな町であります。今年で町制施行85周年を迎えました。昭和7年の綾町の町制施行されたときが7,000人です。現在は7,300人ですが、85年間7,000台をキープしている町であります。平成27年度に行われました国勢調査で初めて人口は増加いたしました。特に子供たちの増加が健著であります。綾小学校、

実は平成12年に全面校舎の改築であったんですけども、校舎が足らなくなりました。そこで来年度2教室、増築の計画を持っている綾町でございます。今日までの綾町のあゆみ、私は地域づくりの視点から、このテーマに迫ってみたいと思っております。みなさんと一緒に、これから住民主体のまちづくり、地域づくりはどうあるべきかを一緒に考えていきたいと思っておりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

相戸 こういった様々な立場の3人の登壇者のみなさんです。最後に一言だけ私も自己紹介をさせていただきます。私は福岡出身で、宮崎の大学に赴任して4年目になります。研究者の立場とともに、3人の子供の子育ての当事者として、地域の中で20年にわたって子育ての社会教育実践者として、私を呼んでいただいたのだらうと思います。それでは早速、始めさせていただきます。最初は、全国でも非常に注目されている綾町の社会教育実践について森山会長にお話していただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

森山 綾町は、平成12年、平成20年7月にユネスコエコパークに登録されました。全国では、5番目に認定されて現在は全国9か所、認定されているようでございます。自治体が主導して登録に結び付けたのは、国内では綾町が初めてであるようであります。全国からも国内では、綾の取組が見本だと高い評価を受けている綾町でございます。ご承知かと思いますが、ユネスコエコパークは原生的な優れた自然を保護すると同時に、自然と共生した経済活動、社会活動を行っていることが求められています。そこが、自然世界遺産とはちがうところであろうかと思っています。綾小、綾中学校とともにユネスコスクールに認定されております。子供たちも世界に視野が広がりました。認定されて5年になりますが、綾町のまちづくりは第2ステージに入ったと思っております。よろしくご

す。今日までの自然と共生した町づくり活動の事例を2、3ご紹介をいたしたいと存じます。

まず1つ目は、山を全町民一丸となって守ってきたことでございます。昭和40



年代は日本は経済成長の真ただ中でありました。その当時は、拡大造林の元、周囲の山々は自然林、照葉樹林から杉ヒノキの人工林に変わってきた時代であります。自然保護、全くそういう話はない時代であります。山を管理する営林署としては、大規模造林の計画があったところでございます。当時の町民の暮らしは、山の仕事に携わった方たちがたくさんいたわけですが、山を残すとなると仕事がなくなるわけでございます。山を守るのか、あるいは仕事を取るのか議論されました。その議論の場は自治公民館でございます。造林計画を阻止できたのは、いろいろな課題を解決し、町長を先頭として町民一丸となって山を守ることができたと思っております。その山を守る経過の中で、いろいろな議論が起きました。照葉樹林の持っている機能と働きなど、町民の署名活動の中で最も身近な課題から地球全人類の課題に至るまで多くのことを全町民が学習する機会となったわけでございます。現在では、いわゆる生涯学習になると思っておりますが、昭和40年初め、全町民で身近な課題を学習したわけでありませう。地域の抱える身近な課題を全町民が学習に真剣に取り組み、本音の議論を行いました。その生涯学習の拠点は、自治公民館でございます。議論なくして町の発展無し、前郷田町長の言葉でございます。綾町の発展の基礎となったものは、日本一の照葉樹林であろうかと思っております。このことが、現のユネスコエコパークの登録の

大きな要素でもございます。

次に有機農業でございます。有機農業のスタートは昭和48年健康づくりの一環として一坪菜園運動を起こしました。家庭菜園で野菜を栽培し野菜をたくさん食べて健康づくりいたしましょう。これは教育委員会の事業でございます。各家庭に野菜の種子を教育委員会の予算で計上して各家庭に野菜の種子を配り、一坪菜園運動を提唱し、その事業自体は自治公民館で行いました。健康づくりは自治公民館活動の重点事項でございます。その結果、綾町の医療費は県内で最も低い町でございます。その経過を経て、昭和63年に自然生態系農業に関する条例を制定いたしました。日本で初めて行政が制定した条例でございます。私はこの条例制定時の担当課長でありました。そして初代の有機農業開発センターの所長でもあります。所長時代、なぜ有機農業なのかと、あえて有機農業と言わなければならないことに現在の食の安全が問われていると思っております。条例のねらいとしましては、行政が責任もって農産物を保証する。もう一つは本来の農業の姿に戻す、食の安全を全国に発信する、このねらいを持って、この条例を制定したところであります。有機農業は、特殊農業でもなければ、高附加価値農業でもないと思っております。本来の農業の姿であると思っております。進めるには生産者と消費者、共同作業で初めて本来の農業の姿に戻すことができると思っております。町民にも条例の中で環境保全など町民の役割も規定しているところであります。綾町で生産される農畜産物、畜産物も含めてこの条例に基づいてより安全で、より生命の高い農産物を作るためにはどうしたらいいのか、その発想転換しながら生産をし、販売をいたしているところであります。市町村で条例を制定するときは国、県の指導を仰ぐことになっております。当時、国、県に行っても、全く問題されない門前払いでした。教科書もない、

国、県からの指導も受けられない手探りの状況の中で、当初のさまざまな課題を乗り越えられたのは、参加者の顔が見える自治公民館ごとの全町民の参加、すなわち町をよくしていくという目標を共有したうえで、学習と議論、話し合い、理解、実践のサイクルを繰り返すプロセスがあったと言えると思います。人は本当に納得して一緒に決めたことは自発的に実行致します。住民主体になりきるにはここがポイントではないかなと思っております。現在も自治公民館ごとに、生産者、農協、行政が一体となり、自治公民館における座談会を毎年有機農業推進のための座談会を計画し、先進地の研修も各公民館そろって研修に行っており、有機農業の推進を今でもやっているところでございます。自治公民館は有機農業を主体的に担う人づくりの場になったと思います。現在は町づくりの主角として活躍されています。消費者から選ばれる産地となりました。価格も安定して農業所得も向上してきている綾町でございます。有機農業の町として全国に発信でき、全国から有機農業を目指す若き青年が転入して新たな視点から農業を行っている青年がたくさんいらっしゃいます。綾町に20の公民館がありますが、5つの公民館は山間部にあり高齢化の進んでいる集落であります。現在は、そこに若き青年が転入して農業を行い最も活気のある集落となりました。「何よりも子供と触れ合う機会があることが何よりもうれしい」と、集落の公民館長さんのお話であります。綾町はJAS有機として行政第一号の認定をいただいている綾町でございます。

次に花のまちづくり運動でございます。まちづくりは人の交流づくりと言われますが、交流人口をいかに多くするか行政の課題であります。綾町は先日イベントして綾競馬に約2万人の方が楽しめました。また照葉樹林マラソンと全国規模のイベントを持っておりますが、町

民運動として交流人口を増やす手段として花のまちづくりを位置づけております。花のまちづくりは自治公民館の大事な事業であります。40年前にさかのぼりますけれども、当時は、自治公民館でも反対の意見が多くありました。ハウス栽培が忙しいのに何の花が町の発展と関係があるなど、多くの反対の意見が当時たくさんありました。年間を通して小さい集落にいたるまで四季花のある町を目指そう、自治公民館長会で何回となく議論され、町長自ら地域に出向き、自治公民館での座談会を開いて、なぜ花かを議論したのであります。理解されるまでに相当な期間がかかりました。教育委員会で現在、育てられている苗は年間52万本であります。春と秋に自治公民館を始め、学校、企業に配布され町民総ぐるみで植え付けから管理まで、子供含めて町ぐるみで花の管理を行っているところであります。年間、四季を通して花のある町であります。綾に来るとほっとするとおっしゃいますけど、それはあの花がみなさんを迎えているのではないかと思っております。現在、綾の花のまちづくりは町民の生活の一部になっているかと思っております。以前、誰一人訪れてこなかった綾町であります。年間100万人を超える交流ができる町となりました。2012年、平成20年カナダで開催されました世界の花のまちコンクールでは、5つ星の最高の賞に輝きました。合わせて住民総参加の花のまちづくりとして特別賞も受賞したところであります。ちなみに世界の花のまちづくりコンクールには、日本の花のまちコンクールで最高の賞、農林水産大臣賞を受賞した団体が、参加資格を与えられます。綾町は第2回平成2年日本の花のまちづくりコンクールで大臣表彰を受けている町であります。この賞を機に花に対する町民の意識も高くなりました。子供にとっては、わが町の誇りでもあります。

以上3つの事例を紹介致しましたが地域づ

くり町民がどう関わってきたかについての事例の紹介を終わります。

相戸 ありがとうございます。トップバッターの森山会長に、綾町の自治公民館実践について3つに絞って話していただきました。成果としては、自己紹介で言われていましたけど、今の時代に人口が増える、しかも、子供が増えるというこの綾町の凄さが、今のお話でわかったのではないかなと思います。私がびっくりしたのは、経済成長の時代の中で自治公民館での全町民の対話による学びから山を守るという時代の判断がなされたこと、住民の健康づくり、食を支えるために、当時の教育委員会が家庭菜園で有機農業を試みるための野菜の種を配ったところなんです。今で言う保健や福祉や環境にもまたがった暮らしのテーマですが、そこが非常に重要だという社会教育行政の判断がなされていたことです。また最後の花のまちづくりのお話では、当初なぜこんなことをするんだと住民の合意形成が得られにくかったという話がありましたけど、52万の花が咲き乱れ、年間100万人が訪れるようになると、花をつくる価値が共有され、住民の自治公民館による学びの効果であると考えます。それでは続いて、竹内校長先生、学校教育の立場からお願いします。

竹内 私は、今、江南小学校という学校にいますが、ここから南西に5キロほど車で走った高台にある学校です。児童数が711名、職員数が47名、PTA戸数が550戸あります。周りは新興住宅地、それから30年ほど前に宮崎市が作った新興住宅地、それと地元の方がずっとそこに住んでらっしゃる土地の3つの地区があります。非常に特異な地区でもあります。学校ができて37年目を今年で迎えています。私がある学校は大塚地区という地区になりますが、大塚地区には約2万人の住民がいらっしゃいます。他にもう1つ大塚小学校、それから大塚中学校という中学校があります。いずれも

700名を超えている大規模校です。結構宮崎市内の中でも、人数が多い地区ということになります。



学校の経営方針というのがあるのですが、経営方針の中で、感動する子、頑張る子、優しい子、協力する子という4つのスローガンを立てて子供たちを育てているのですが、それらの頭文字を取ると「かがやき」という頭文字になります。私が学校に来て、地域とつながる学校づくりということを重点的な取組のひとつに入れさせてもらいました。実際、私は江南小に来る前は行政におりましたので、全く見ず知らずの土地に赴任をしたところなんです。宮崎市は中学校区に地域協議会というのがあり、大塚地区の大塚中学校区の中にも大塚地域協議会というのがあります。その組織の中に大塚地区まちづくり推進委員会というのがあります。宮崎市内は、それぞれの中学校区にまちづくり推進委員会というのがありますので、そこを中心にしながらその中学校区のまちづくりにいろんな方が携わっているところです。そのまちづくり推進委員会のそれぞれ組織の中に、学校の職員が入って会議等に出席しています。私もそのような会議に行くことがあります。ですので、宮崎市内、大塚小、江南小だけではなく宮崎市内の学校というのは、まちづくり推進委員会と密接な関係があるというところでもあります。私が3年前に江南小学校に赴任しましたが、全く見ず知らずのところですので、知り合いとかも全くいない。地域とつながる学校づくりという重点的な取り組みを掲げ、どうすればいいのかということを考えました。考えたことがとにかく出席の要請がある会合、会議、お祭り、文化

祭、それから懇談会など、とにかく全て用事があるなしに関わらず、出席しようという気持ちで学校の方に赴任をしました。実際にその大塚地区である会合等には、大体同じようなメンバーの方が出合われます。地区会の会長さんとか、公民館の館長さんとか、地域協議会とか、まちづくり推進委員会の委員さんとか、そういった方々ですが、大体校長もそういうところに出席し、顔を合わせるわけです。最初のうちは、「今度、江南小学校に来た校長はどんな人だろう」というように見てらっしゃいますけども、何回も何回も同じような顔触れになるわけですので、気軽に声をかけてもらうようになります。一番良いのは飲みにケーションです。お酒を飲みながら話をすると、次の日はすぐ向こうの方から話しかけてくださいます。やはりそれが大事ななと思い、会合に出続けています。一度こういうことがありました。大塚地区の総合文化祭というのがあり、午後のステージまで来賓席で見ていたんです。そうすると「今度来た江南小の校長は文化祭に最後までいたようだ」と地域の方がおっしゃっていたそうです。ほんのちょっとしたことで「今度の校長はなかなか面白いよね」と見ていただけると、逆に学校も良いように見てもらえるのかなと思っています。私が今、地域と学校をつなぐ役目をしているのかなと思います。昔から社会教育と学校教育は両輪だと言います。車の両輪をつなぐ軸のことをハブと言いますが、そのハブの役割を私がさせてもらっているのかなと思います。江南小は大塚地区まちづくり推進委員会と非常に密接な関係にあります。

1つ紹介をしますと江南小校区は、江南小校区の地区体育祭というものがあります。普通大体、大塚町であれば大塚町の町民体育祭とかありますけれども、小学校区だけで地区体育祭を実施しているのは、なかなかないと思います。おかげさまで、今年で31回目を迎えました。

この体育祭は、まちづくり推進委員会、江南小地区の自治会や子ども会と連携しながら、PTAが中心となって学校も協力をするというような形で開催されています。ですので、開催するにあたり、やはり地域やまちづくり推進委員会の中にもキーパーソンになる方がいらっしゃいます。その方を中心としながら進められています。学校というのは敷居が高いとよく言われますが、校長が地域に出向いていくことで、敷居を低くしているのかなと思っていますところ。

相戸 ありがとうございます。昨日の分科会から、学校と地域の連携の必要性が議論されていますけど、制度やシステムの枠組みだけあれば連携できるのかといたら、おそらく難しいと思います。竹内校長先生の実践は、飲み会も含めて呼ばれたら全部顔を出し、最後まで参加するという形式的な充て職ではなく地域の一人として、学校という一人の関わる人間として連携するというエピソードを具体的に紹介いただけたのではないかと思います。また、校長自らそれをやるというのが、学校全体の先生たちの動きやすさ、連携の価値みたいなものが浸透しているように思います。それでは清國先生お願いします。

清國 今、森山会長さん、竹内校長先生の話伺いながら社会教育というのは「覚悟だな」ということがよく伝わってきたように思います。覚悟をして徹底的にとことんやらなければ実らない。スマートにカッコよくやる活動ではないなというようなことを感じました。

今日は最初のところで青島臼太鼓踊りを拝見いたしました。素晴らしい活動を継続しておられるなと思うわけですが、その踊りを見ながら、太鼓を見ながら何を考えていたのか話をさせていただきます。私はその袖の方に座っていたのですが、一番強く思ったのは、今、私たちは何を手に入れようとしているのだろう

か、ということでした。今、私たちが暮らして
いて、生きていて皆さん何を求めていらっ
しゃいますか。今の経済優先社会の中で、ひょ



としたら空しいものを追い求めてしまっている
のではないのでしょうか。地に足のついた、何か
人間にとって必要な、かけがえのないものを
求めているのだろうか、そんなことを考えさせ
られました。私たちは豊かさや便利さの中で、
気づかぬうちに多くのことを失っているわけ
です。便利になるということは、それと等しい
ぐらい何かを失っているわけです。人間として
かつて持っていたものを。その失っているもの
の重要さを、今日の舞台で少し考えさせられ、
ヒントを頂けたように思います。どうしても私
たちは合理的に物事を考えがちです。ですから
自分に関係がないと思えば帰ってしまう、今日
は挨拶が役割なのだと思えば挨拶したら帰
っていく、発表がすんだら帰っていく、そうい
うことを私たちはついついしがちです。実際は、
その周辺にたくさんの学びがあるはずですし、
学びでなくてもいろいろな事を感じる時間があ
るはずなのですが、そういうことを今やらなく
なっています。全体をとおして、私たちは
意味を作っていくのだと思います。生活の一部
で私たちは意味を作っているのではなくて、あ
るいは人生を作っているのではなくて、私
たちが生きている無駄なことも有益なこともす
べて含めて人生の意味や価値を形成しているの
だろうと思います。そこのところを今一度思い
起こさなければならぬのだろうということ、
芸能とか文化とかということを行政的には切
り捨てようとしています。経済的な価値を生み

出さないからでしょうか。みなさんもご覧にな
ったように、何がしかの価値を生み出して、そ
れが維持されているのです。今すぐには見えな
いけれども、10年後、20年後、100年後に実を
結ぶ意味をまさに作っているのです。ご参集の
皆さん方の活動もそうなんだろうと創造しま
す。私たちはやはり経済に振り回され過ぎだ
と思います。経済的な感覚、価値観に振り回さ
れているから合理的に、これは有益そうだ、短
期間で成果が出そうだ、これは短期間で成果が
出ないし、何年たつてどうなるか分からないから
やめとけとなる。そういうことは経済的な価値
観の中で判断がなされることだろうと思いま
す。もっと私たちは教育的な価値観のもとで10
年後、20年後をどんな地域になって欲しい
のかという視点で物事を考え判断して行かな
ければいけないと思います。叶うかどうかは別
として。そういう意味で教育は、みんなが当事
者であって経済は利益を生むものだけが当事
者なのです。ですから森山会長さんがおっしゃ
ったように反対が起こるのです。花づくり、何
になるんだ、と。自分のもうけにならないじゃ
ないか、自分の時間が有効になっているとは考
えられないじゃないか。そういうことなのだろ
うなと思いました。

それでちょっと話題を変えますが、社会教育
の歴史、もちろん戦前からあったのですが、戦
後の社会教育法が1949年ですからもうすぐ80
年という節目を迎えるわけです。社会教育とい
うのは、後期高齢者です。社会教育は、後期高
齢者だから見直さなきゃいけないのか、いやい
や必要ないからちょっと衣替えした方がいい
のではないか。そういう議論が一方で起こって
いたりします。本当でしょうか。後期高齢者だ
からもういらぬのか、古臭いのか、いやいや
そうじゃないのですよね。

社会教育に関わっている人は80歳の人に関
わっているわけではありません。子供からそれこ

そ校長先生おっしゃったように学校と地域とが勉強しながら子供を育てるそういう社会教育活動も行われています。今日の臼太鼓の取組も小学生が地域の活動に関わっています。多くの世代が関わることによって社会教育というのは豊かになってきています。その積み上げたものをどうやって発展させていくかということだと思えるのですよね。うまい具合に更新をしていかなければならないのだろうと思います。

一方、地方創生は、たかだか数年の政策です。政権が変われば変わるかも知れません。無くなるかも知れません。見直されるかも知れません。そういうややうつろうみたいなところがあるわけですが、社会教育は社会教育委員さんがいます。社会教育主事がいます。社会教育という業務を担当する行政の部署があります。そういう中でみんなが協力をしながらまちづくり、地域づくりに社会教育の力を発揮しようと考えています。まさに、そこが大事なことなんだろうと思います。社会教育委員さんがここにたくさんいらっしゃると思いますが、社会教育の専門家ではない、その通りです。社会教育委員にはなったけど、社会教育委員が何をすればいいんだ、ということが繰り返し問われ続けています。社会教育の専門家ではないですけども、地域活動の専門家です。地域活動に長年携わってこられた方が選任されることが多いのが社会教育委員の特徴ではないかと思います。その方々にもメッセージを送れるとしたら、こんなことを考えています。投網ってありますよね。あの川にバンと網を投げる、私は投網師の役割を社会教育委員さんには担ってほしいと思います。なぜか、それは地域にはさまざまな良い活動があるはずなんです、なかなか皆さんに認知されるようになっていない。ちょっと隣の地区に行くと情報は届いてない。ましてや市町村域で考えるとさらに怪しい。そこで社会教育委員さんは投網を投げて各地区で良い活動を

やっている人たちをすくいあげる、見える化する。そしてこのような活動にどんな価値があるのかということをしつかりと行政に伝えていく。今日は最初の保存会もそうでしたね。保存会があって、それが無形民俗文化財に指定されているわけですね。その指定されるということの意味は大きいですよ。ただただ任意団体がやっているということではなくて、無形文化財に指定されているからこそ、そこに残そうという意識や意欲や使命感が生まれてくるわけですよ。それが行政の行える象徴的な仕事だと思いますし、そこに社会教育委員さんがくさびを打ちこむ、投網を投げてひっぱりあげて、それを行政にどうつないでいって、その良さをずっと継続させるために何ができるのか、是非そういう感覚で社会教育委員として、地域と行政とをうまくつないで、この地域が10年20年30年続く地域になるような、そういう働きをしていただきたいのです。もちろん個人的な活動は維持・継続をしていただきながらというところで。ひとまず最初の話はこれくらいです。

相戸 ありがとうございます。それぞれの立場から、人と人をつむぐ社会教育の実践、特に地域住民主体の社会教育実践の話を進めていただきました。今、清國先生が言われたのは、物の豊かさを求めてきた時代の中で芸術や文化、先ほどの青島臼太鼓のような心の豊かさを目指した地域活動をいかに目指していけるかというお話だったかと思います。特にそのような社会教育実践は10年20年後の、中長期スパンで方向性の価値を見定めていくことが大事ということをおっしゃられた気がします。また、社会教育委員さんが、そういった社会教育実践を発掘し、見える化し、つなぐ役割があるのではないかというお話を具体的にお話いただきました。3人のお話の共通する点は、清國先生は人が大事、竹内校長先生もやはり自分がどう地域の人と本気で関わるか、もしくは森山会長

の自治公民館活動では住民一人一人がどう学び、学びの場を作っていくか、そういった社会教育を支える担い手の存在ということが不可欠であるということが分かってきたかなと思います。

これからまた2順目の発言をお願いしていきたいのですが、やはりその地域住民主体の実践をより豊かにしていくために、どういう担い手の存在が必要なのであるか、そういった視点みたいなところをたっぷり伺っていきたいと思います。それでは森山会長からお願いします。

森山 地域づくりの視点から、社会教育の視点でありますけども、住民主体になりきれるかではないかなと思っています。それは生活の場に生涯学習を根づかせることであろうと思っています。集める学習から自ら集まる学習にありたいと思っています。集める学習では限界があると私は思っています。ややもしますと社会教育では集める学習に陥りがちであります。自ら集まるような体制づくりをどう築くかでもあろうかと思っています。それには、生活の場に最も身近な所に学び場があることでもあろうと思っています。実は、綾町では平成3年に生涯学習についてアンケート調査、全町民対象に行いました。学ぶ場として最も身近なところが圧倒的に多かったところあります。それは、綾町で言いますと自治公民館であります。町公民館よりも、最も身近な自治公民館に生涯学習の場があってほしい。そういう町民の意向でありました。そこで綾町では、生涯学習講座を自治公民館を拠点として、それを補完するという形で町公民館にて現在行っております。自治公民館で今年間146講座。町公民館で30講座、年間を通して生涯学習講座が開催されております。延べ7,000人が生涯学習に参加をいたしております。生涯学習講座は、生涯学習の一部ではあります

けども、私は核になるものであると思っています。講座の企画から運営まで自治公民館の生涯学習推進員の手によって運営されております。行政は講師の一部を負担するのみであります。出席率も非常に高いわけではありますが、生涯学習は趣味の講座が主体でありますけども、地域の課題、地域づくり、福祉、教育と学習、語らいの場にもなっています。そこで住民主体になりきるにはでありますけど、学んだことを行動に移し、運動として展開する、ここまで来ないとなかなか住民主体になりきれないと思っています。学んだことを行動まで移すかどうかであります。身近な課題を学習し、話し合い、そしてまた地域の課題に気づき実践し、その繰り返しのプロセスが大事だと思っています。紹介いたしました綾町が照葉樹林を守ったことも、あるいは有機農業として全国に発信できる町になったのも、花のまちづくりで世界の花づくりで最高の賞を輝いたのも、町民がなりきって自らが活動し実現したと思っています。社会教育活動から公民運動であります。公民運動は全町民の参加の運動であります。公民運動としてみんなが参加して、自ら参加して公民運動として展開できたときに、初めて住民主体になりきれんと思います。それには組織がありますけど、核の母体となる組織、プラットフォームをいかに築くかあります。プラットフォームはいわゆる駅のプラットフォームであります。ここでいうプラットフォームは地域のさまざまな機会や団体と集まり情報や教育資源を共有し地域づくりや人づくりなど共通の課題を解決するために連携、協働して取り組んでいく場のことあります。このプラットフォームであります。このプラットフォームをいかに築くかであると思っています。各市町村、歴史があります。文化があり特性があります。独自の風土があります。その特性に応じたプラットフォームを築く、わが町のわが村のプラットフォームをいかに築

くかここは知恵の出どころではないでしょうか。プラットフォームに求められるものとして、社会教育公民館活動の拠点はもちろんでありますけど、産業振興の拠点として、あるいは社会



福祉活動の拠点として、防災、健康づくりの拠点として、学校教育を補完する拠点として、全てに対応できる柔軟なプラットフォームでありたいと思います。その根底には行政依存でない住民参画の理念があることが大事だと思います。組織が永続するには日々生活の中に組織が生きていることであろうと思います。その組織が上手く機能するには組織の中に班、10個か20個の小さい班がありますけど、綾町では「こじゅう」と言っておりますが、その「こじゅう」が大事であると思っています。その班、「こじゅう」に確かな絆社会が築かれると思います。私たちは絆社会を築こうと運動を展開していますが、この小さい班でまずは絆をつくって、それから行政の大きな組織に絆を広げることではないかなと思っています。隣近所支えあう、声を掛け合う、助け合う社会は公民館運動の原点でございます。行政の手法、規模が違っていても社会がいくら変わろうとも絆社会の構築は永遠のテーマでもあると思います。また、社会教育に携わる私たちの使命でもあらうと思います。

組織が永続するには人も大きな要素でございます。いかに人を育てるか、それはプラットフォームの中に人、リーダーが育つ、あるいは日々生活の中で活動の中で生活の中でリーダーが育つ環境をいかに構築するかではないかと思っています。さらに時代を担う人材育成も

大切なテーマであろうと思っています。先ほどから出ていますように、時代を担う人材をいかに育てるかでございます。地域で子供を育てる、自然の中で子供を育てる、自然ほど偉大な教育者はいないと言われてますが、果たして私たちは自然に背を向けているのではないのでしょうか。もう一度、自然と正面から向き合って自然の中で子供を育てる、そういう体制づくりが大事ではないかと思っています。実は宮崎県ではもう一度地域、自然に子供を返そうということで第3日曜日を家庭の日とし、家庭の日を社会教育連絡協議会の重点推進事項として、今、進めているところでございます。時代を担う人材育成は、学校教育との連携もあります。綾町では紹介いたしましたように、綾小、綾中ともにユネスコスクールに認定をされております。学校の経営方針として、持続可能な社会の担い手として故郷を愛し故郷に誇りを持つ児童生徒を育成する学校の経営方針であります。学校とも積極的に取り組みいただいているところでございます。地域の学校として、地域と学校が一体となって、今、綾町では進めているところであります。

綾町の事例を紹介いたしましたけれども、もし自治公民館制度が綾町に根付いていなかったら山を守ることも、あるいは有機農業の町としても、ユネスコエコパークの登録もできなかったと思っています。自治公民館制度が定着するには行政も住民も努力し、ともに汗を流してきました。最も身近な課題を学習し、議論し、取り組む過程で今日のゆるぎないコミュニティ社会ができたと思っています。そこには一貫した行政の哲学あり、理念ありビジョンがあった。さらに、そのことを行政と住民が同じ方向を向き、共有し、行政と公民館住民が表裏一体、車の両輪として町づくりを進めてきたこと、中でも自治公民館を拠点とするゆるぎない自治意識の基盤があったことが言えると思いま

す。そして、今、紹介しました3つの事例もそういう成果が出たのではないかなと思っています。以上です。

相戸 ありがとうございます。冒頭に言われた「集める学習」ではなく、「自ら集まる学習」には、ほんと目から鱗でした。人口7,300人で延べ7,000人が生涯学習講座に参加するということには本当にびっくりしましたが、この人数が「自ら集まる学習」を物語っていると思います。今、話を伺ってきて、1970年代前後の「綾町の自治公民館すごいな、でも現在はどうかのだろう」と思われた人も多いのではないかと思います。私は、2週間ほど前、綾町に行って、今の状況を聞いてきました。人口が増えていますし、子供が増えていますし、若い世帯が移り住んできている中、「若い人とか、この自治公民館の活動をどう思っているのでしょうか」を伺ってきました。そしたら、こんなエピソードを話してくれました。自然と共生しているため、近年、鹿が異常に繁殖して町が駆除しなければならないという課題が出てきたということでした。「新しく町に来た人や若い人からは、駆除のお金、税金を投入することに、反対は出ないのですか」という意地悪な質問をしてみました。そしたら、自治公民館で、今までの流れとか、今に至る経緯というのを丁寧に話し合い、進める中で、ぜひ自然との共生のため鹿にお金を使おうと、若い人たちが自ら納得していつているそうです。まさに合意形成の土台が自治公民館の学びの中でつくられていることがわかります。綾町の自治公民館実践の学びによって、現代の若い人までその価値を引き継いでいることがわかり感動して帰ってきました。

それでは、竹内校長先生、担い手が大事という話でキーパーソンについて、学校教育の立場から、ぜひよろしくをお願いします。

竹内 学校には子供たちが通学してきます。そして子供たちは地域に住んでいます。私たち教

員としては、一度外に出ても良いので、ぜひ地元に戻って来るような子供を育てたいという願いがあります。これは地域の方々も同じようなことを言われています。子供たちは、その地域に住んでいます。残念ながら教職員が、その地域に住んでいるのかどうかというところですが、なかなかそうではりません。ですので、地域にこれから住民主体となる地域の担い手を育てるとするのは、子供たちに職員の思いや地域の思いを託して育てていかなくてはいけないと思います。

今、宮崎県内の教育事務所、教育関係者の中に社会教育主事と呼ばれる先生方が12、3人ほどしかいません。昔は、各市町村に派遣社会教育主事の先生方が全ていらっしゃいました。その他、教育事務所や教育委員会にも、社会教育主事がいらっしゃいましたので、それから比べると、今は10分の1なのではないでしょうか。それぐらいの数になってきています。市町村についても、教育委員会の中に、社会教育主事の資格をもっている方が非常に少なくなっているという話も聞いています。

その住民主体の担い手ということでは、宮崎市はまちづくり推進委員会の中に地域コーディネーターという方がいらっしゃいます。その方が、学校と地域をつなぐ役割をしてくださっていますので、そういう方々が増えると良いと思います。また、学校の先生は頼まれたら、一生懸命される方々が多いです。「ちょっと頼むから手伝ってくれませんか」と言うと、「うーん」と言いながらも手伝ってくれる先生は多いと思います。ぜひ地域の行事とか、そういうところに「ちょっと来てくれませんか」と誘ってくだされば、先生方は積極的に来てくださるのではないかと思います。江南小は、市の指定を受けて学校支援地域本部事業を今年度から行っています。学校への支援を調整する地域コーディネーターという方がいらっしゃ

るのですけども、江南小はPTA会長さんになっていただいています。なぜPTA会長さんに地域コーディネーターを頼んだかということですが、PTA会長さんもまちづくり推進委員会や地域協議会等、そういった会の委員でもあり、そういった会合にも出られているので、各自治会の会長さん等とも顔なじみです。ですので、いろいろな学校への支援を地域の方々に頼むときに頼みやすいのではないかと、頼んだところでは、学校と地域をつなぐキーマンとなる方がいらっしゃるの、学校としては非常にありがたいですし、そういうキーマンが非常に大事だと思います。

新学習指導要領が改訂になり、平成32年度から全面実施になりますが、宮崎市もその準備をしているところです。教育課程の理念の中には「社会に開かれた教育課程で地域とうまく連携共有しながら進めること」とありますが、簡単なことではないというのが本音なのではないでしょうか。学校の先生の中には社会教育主事の資格を持っている先生方いらっしゃいます。そういう先生方は非常に社会教育に目を向けていらっしゃいますので、そういう方を地域に引っ張り出すということもいいのではないかと思います。

今回のテーマは、人と人をつむぐ、つむぐという言葉をつかっていますが、何をつむぐかというやはり人です。人と人をつむいでいるということだと思います。社会教育もやはり人です。その人をどこで、どう見つけてどう生かすのか。それが一番のポイントではないかと思えます。学校もそうです。地域に目を向けている先生を地域に引っ張り出すことで、その先生が周りの先生を引っ張り出してくれるのではないかと思います。このつむぐという言葉を知ると私は中島みゆきさんの糸という歌を思い出してしまいます。歌の最後は「縦の糸はあなた、横の糸はわたし、逢うべき糸に出逢えるこ

とを人はしあわせと呼びます」という歌詞になっています。この「しあわせ」という部分なのですが、どういう漢字を書くかご存知でしょうか。普通は、「幸せ」という字を書きますが、中島みゆきさんの「しあわせ」



は、「仕合わせ」と書きます。「幸せ」と「仕合わせ」の意味は若干違うみたいです。「仕合わせ」は、巡りあわせが良いこと。つまり人と人との出会いという意味なのだそうです。改めて私も人と人との出会いということを考えてみたのですが、こういう社会教育行政に入ったきっかけというのも教員時代に体育指導委員という社会体育の仕事をしていただいたおかげでもありますし、僻地に行ったときに、その土地に住んだことで、その土地の臼太鼓をやってみないかと声をかけていただいたのも、多分社会教育に足を踏み入れたきっかけのひとつだったのではないかと思います。そういった人と人との巡り合い、出会いを大事にしたいと思っていますし、そうやって声をかけてくださった方が学校と地域をうまくつないでくれる人なのかなと思います。

相戸 ありがとうございます。私も中島みゆきの「糸」、大好きなのですが、まさかこの歌の歌詞が出てくるとは思いませんでした。おそらく昨日の分科会も学校と地域の連携の必要性が話題になっていましたけど、一方で、学校によっては敷居が高かったり、必要性を理解した先生がいない、地域や保護者のリーダーに出会えないとかいろいろ課題があると思います。この歌詞の言葉でいうと、会うべき糸に出会えばオッケーなのですが、なかなかそうならないということなんだと思います。しかし、竹内校長先生は自分で動かされていましたよね。

さっきのお祭りとか地域行事とか飲み会とか。動いたら会うべき糸が見えてくるということでしょうか。その辺りを竹内校長先生もう一言お願いします。

竹内 学校の敷居が高いと言われてます。なかなか学校行きづらい。保護者の方でも参観日のときじゃないと、あと学校の方でいろいろあって呼び出されたり、そういったときにしか来られない。ましてや学校に子供たちが行かなくなったら足が遠のいてしまう。高齢者の方々も、お孫さんがいなければもう来ない、というようなどころがあります。学校、昔は開かれた学校とよく言っていましたけども、開かれた学校というのは良いですよ、来てくださいというのが開かれた学校ですね。でも待ちなんです。学校というのは、本来、やっぱり今、これからは会長も言われましたけど、学校が出ていくことを考えていかななくてはいけないかなということは考えています。なかなか校長として、そういったことが上手くできていませんけども、学校もやっぱり出向いて行くというスタンスが必要かなと思います。

相戸 ということは社会教育委員さんとか、地域側の人も逆に動いて出て行って、そしたら巡り合うということですか。

竹内 今日お見えになっている方、社会教育委員さんがほとんどだと思いますが、社会教育委員さんの中には学校の校長先生もいらっしゃると思います。各市町村で行われる社会教育委員さんの会議は、年2回か3回なのではないでしょうか。その時ぐらいしか、校長先生とお会いする機会がないと思います。そういうときに、ただ会って話をするだけではなく、その校長先生が勤めていらっしゃる学校に行ってみるといっても学校を知るひとつの方法かなと思います。学校を知らないのであれば、まず行ってみることも必要でしょうし、逆に校長先生が学校の実状を社会教育委員会会議の中でお話する

ことも必要かもしれないと思います。

相戸 なるほど、やはり会うべき人に会おうまで動き続けることが大事なのですね。待っているだけではなく、動くということが、学校側も地域側も大事なのですね。委員の方も、そこに動いていくというのが大事なのかもしれませんね。

それでは清國先生お願いします。

清國 喋りたいことはたくさんあるのですが、時間が限られておりますので、少し言葉を選びながらみなさんにお伝えしようと思います。

「帰巢本能」という言葉があります。私もたまに夜、ネオン街でお酒をいただき、気がついたら自分の家に帰って布団の中でちゃんと寝ていることがあります。人間は「帰巢本能」があることは実感しています。巢に帰るわけですよ。一方、「帰郷本能」はあるのでしょうか。「帰郷本能」、故郷に帰ることです。帰省ではないですよ。多分ないんですよ、放っておくと。親がいても、私も実際は帰れていないわけですから。長男ですけど。そうすると「帰郷本能」というのはないので、帰郷の意識をどうつくっていくかということが大事なことなのだろうと思います。還流させるという、ちゃんと郷里に戻ること子供が小さなうちから仕掛けられるかどうかということなのですが。私自身、故郷は大分県の国東ではございますが、今住んでいるのは高松市です。私のライフワークのひとつがプレイパークという子供の遊び場です。もう始めて15年になります。15年やっていて、最近、良い循環が出てきたなと思っています。それは何かというと、プレイパークという遊び場に、遊び場を小学生のころに経験した子たちが香川大学の学生になって再会するのです。すぐさま私の授業を受けてくれ、授業を通してプレイパークにボランティアとして関わってくれています。自分たちが育ってきたかつての公民館、現在のコミュニティセンターの運動場が

記憶に残っているのです。毎月、第三土曜日の活動ですが、そこでは何をやっても大概のことは許される。でも、集団で遊ぶので集団のルールはありますけども。そんな自分たちが育ててもらったという感覚をどういうふうに持たせるか。親に育ててもらうのは当たり前です。小学校に通うのは中学校に通うのは当たり前です。帰郷と言ったら、郷里に帰るのです。家庭に帰るのではない、学校に帰るのではないのです。郷里に帰る。それは郷里に思い出がないと、郷里に愛着がないと、帰郷ということは考えないわけですね。帰る郷ですから。そう考えると地域での活動というのはとても大きな意味があるのです。地域に育てられたという。それはたとえ帰らないとしても、その子が別の地域で暮らすとします。その地域に行ったときにちゃんとその地域を大事にできる感覚が持っているかどうかということです。一人が無縁の状態に暮らしているのがわずらわしくなく楽チンだと思うのか、先ほど相戸先生がおっしゃったように動けるのか。動けるといえるのは、自分が育ててもらった恩義のようなものを感じていないと動けない気がするんですよね。そこで地域の中で育つということがいかに大事なことになるのかがわかる。今は地域と関わらなくても生きられますからね。そういう中であえて作らなきゃいけないわけですね。昔は皆さん、多くの方々は子供のころから青年ぐらいまで義務がたくさんあったと思います。出なくてはならない会合であったり役割だったり、そういうのがたくさんあったと思います。今、ありますか。自由意思で参加できますよね。つまり、行かないということのある種、権利のように言える、私は忙しいから。昔忙しいなんていうことを言っておられなかったわけですね。調整して行くわけですね。他の用事を調整して、そこに私は行きます。行かなくちゃいけない義務があったわけですね。今はそういう意味では幸せ

です。忙しいと言っておけば行かなくて済むわけですからね。いやでもそれって本当にいいことなのかっていうことですね。今、義務が少ないからこそ、求められて



いるものは何かというと、コーディネーターの役割とかファシリテーターの役割、こういうのが社会で多く求められるようになっていきます。義務であれば引っ張り出せばいいのです。義務でないので、やる気とか意欲を引き出さなければいけないのです。やろうと思える気持ちを引き出す。そのためにファシリテーターやらコーチやらコーディネーターやら、そういう役割が必要になってくるというわけですね。そういう力量を身に付けなければ地域が上手く経営できないということです。そういうふうに時代はシフトしています。

平成 30 年度から学習指導要領が段階的に実施に移され、最も遅い高等学校で平成 34 年に完全実施となるようです。社会教育主事の養成課程も講習も 32 年度から大きく変わります。そこには、そのファシリテーションやコーディネーション、そういう能力を身に付ける授業科目が新たに加えられます。ここでも時代は大きく変わっています。それともう 1 点、家庭教育を支援したり地域で子供を育てたりする中で、配慮をしないといけないなという点を加えたいと思います。教育界で流行っている言葉なのですが、非認知能力や非認知スキルです。言葉だけではちょっと分かりづらいですね。認知症かと勘違いされるといけませんね。象徴的な言葉としては、自制心、セルフコントロールの力が大切だ、ということが強調されています。やりぬく力とか諦めない力も同じです。これを子供たちに身に付けさせないと、大きく変わる世

の中を生き抜けないのです。だって今ある仕事が半分ロボットやAIによって置き換えられてしまうそうだからね。私たちは仕事からあぶれてしまうわけです。やりぬく力や諦めない力を持った若者が新しい仕事を作っていきながら地域の中で一定の役割を果たしていかなければいけない時代を迎えます。ぼっーとしていたら失業者ばかりが増えてくるわけですね。もちろん3K（汚い、きつい、危険）と呼ばれる職業は残ります。3Kを担うのは誰か。これは開発途上国から来る移民の方々であろうと予測されます。とてもじゃないですけど、日本人はそこを担えません。残念ながら我慢がききません。でもそこを担わなければ国は支えられないですよ。さてどうするか。そしたらやっぱり地域の力を見直していかなければいけない。だって地域がいろんな課題を抱えているわけじゃないですか。いろんな課題に立ち向かっているわけじゃないですか。綾町の実践を伺うと、自治公民館の中で解決策を粘り強く諦めずに取り組んでいる。だからこそ成果が出ているわけじゃないですか。そういう感覚をやっぱり子供たちに伝えていかなければならない。地域の役割ってまさにそこなんだろうなと。私も、実践を重ねながらそんなことも考えているようなところ。まだ言いたいことはあるのですが、時間のようですのでこれでマイクを置かせていただきます。

相戸 ありがとうございます。今、清國先生の話聞いて、なるほどと思ったのが戦後の社会教育は、ある種、義務ではないのですけども、結束力が強い団体活動を展開されてきた側面があります。現代においては、先ほど清國先生が言われたように、参加を自己決定できるとか選択していけるような時代だと思うんですよ。だからこそ、そのやる気や意欲を引き出すコーディネーターが重要ということになります。ありがとうございます。新しい学習指導要

領の話が出ましたが、特別活動の内容においても、清國先生が言われた現代社会における課題解決能力を子供たちに身に付けさせることが強調されており、話し合い活動を通して、互いの意見の折り合いをつけながら合意形成のプロセスを体験させていくなど、学校教育の中でも社会教育の担い手みたいな力をさらに育んでいこうとしている方向性が見えます。

では、これから会場の方に最後の言葉として、3項目いただきますが、今、清國先生のお話を聞いて時代とともに求められるコーディネーター能力っていうのは、若干やっぱり変わってきているのかなという印象を受けました。以前から社会教育の担い手はコーディネーターであれとかコーディネーター能力が大事と言われてはいますけど、改めてコーディネーター能力というのは何なのかというのをもう一回考え直す、いや常に考え直し続けていく必要があるのかなということを感じました。登壇者の皆様方、発言時間が足りないかと思いますが、あと残り10分程度でこの会を閉めなくてはなりません。私の進行のまずさから登壇者の皆様には申し訳ないのですけども、最後の問いにいきたいと思います。最後は、改めまして今回のテーマである地域住民一人一人の主體的な活動をどう支援していくか。支援者の意義や学習活動支援のネットワークを進めていくために大切にしたいポイントを一言ずつお話ししたいと思います。

森山 繰り返しになりますけど、地域づくりでポイントはですね、いかに住民主体になりきるかであろうと思っています。なりきって初めて地域づくりに展開でき、またいろんな事を成し得るのではないかなと思っています。それはやはり、地域に生涯学習社会をしっかりと根付かせると、みんなで学習して納得するまで話し合いをして、実践まで行動まで移す、そうなったとき初めて住民主体になりきるのではないかなと思っております。さらにまたその根底には、

行政と同じ方向を向きながら行政と車の両輪として町づくりを進めるということも大事だと思っております。さらにコミュニティ社会、いかに我が地域の我が町のコミュニティ社会を築くかも、大きなポイントであろうかと思っております。根底には、やはり住民参加、郷土愛の理念をどう感じ、土壌を構築するか作るかではないかと思っております。

さらにまた、新しい視点からではありますけど、外の力を取りこむことも、これからの地域づくりで1つのポイントであろうかと思っております。現在社会も一極集中から地方の時代に、今変わろうといたしております。外の力、人材を取り込み、町の活性化を図るということであり、はちみつ文化という言葉がありますが、蜂は蜜に集まり、人は文化に集まると言われます。私は人を呼び込むのは施設でもない利便性でもない文化だと思っております。その文化は日常の営み生活文化であります。いわゆる生涯学習活動の総括が生活文化に高まるのではないかなと思っております。我が町の教育文化をどう高めるか、それが生活文化を高めることになると思っています。わが地域の、わが町の独自の生活文化を全国に発信する、そして人を呼び込む。外の人からの力を取り込みわが町のわが地域の活性化を図る。そして、またそのことが、この文化は教育の町としても発信できるかなと思っております。そういう生活文化の町で子供を育てたいという親御さんが今たくさんいらっしゃいますので、そういう方を呼び込むことも我が町の生活文化をいかに高めるかであろうと思っております。人は人を呼ぶ社会でもあらうと思っております。そういう土壌、風土をいかに築くかが、これから私たちの社会教育に携わるもう1つのポイントではないかなと思っております。

相戸 ありがとうございます。竹内校長先生よろしくお祈りします。

竹内 学校というところは、皆さんどういうイメージを持っていらっしゃいますか。結構閉ざされた、閉鎖的で独特の文化があるというよう

に思われているのではないのでしょうか。先生方の中には、外部から人が入ってこられて見られるということに対して、少し違和感を感じる方は少ないと思います。なかなか簡単ではないことですが、これからは、いろいろな方々とともに子供を育てるという、そういう意識に変える必要があると思います。

学校支援地域本部事業では、地域は学校の応援団であり、サポーターだ、と言われております。これからは、これをもう1つ上のパートナーという考え方でいくのが、これからの学校教育と社会教育が上手く結び付くキーワードではないかと思っております。応援団、サポーターというと、どうしても学校が上です。それを下から地域が支えるという構図になってしまいます。パートナーとなると、お互いが対等ということになります。子供の教育を全て学校に任せるということではなく、子供を育てるためには、地域と学校が一緒になって育てていきたいと思います。意識、これをもつことが、とても大事だと思います。

地域の方々も保護者も学校もより良い子供を育てたいという願いや思いは同じです。育てる方法や手段が違うだけです。そういう願いや思いを上手くつむいでいきつつ、その願いや思いを未来に、そして子供たちにつむいでいくということも、すごく大事だと思います。

相戸 ありがとうございます。それでは清國先生お願いします。

清國 皆さん、この会が終わって、この会場を後にされるときの姿をイメージしてください。ありがとうございますと声を掛けるのはどなたでしょうか。大会の準備や運営をしてくださった方々です。本来お礼を言うのは参加する側ですよ。これだけの大会を準備運営して下さってありがとうございます。でも現実には逆です。そこで何なのだろうかというところから話をしたいと思っております。全国社会教育委員連合は、なかなか運営が厳しくてなくなるかもしれせん。社会教育委員連絡協議会九州プロ

ック、これもみなさんあったほうが良いと思われませんか。県の社会教育委員連絡協議会、なくても良いと思っておられませんか。いやいや市の連合に入らなくてもいいじゃないか、県の連合に入らなくてもいいじゃないか、自分たちの足元がしっかりしていれば。PTAもどうですか。PTA、自分の家庭がしっかりしていればPTA活動なんかしなくて良いだろう。そんなものではないでしょうか。でも、今は、世の中はだんだんそうになってきています。しがらみからどんどん自由になりたい。そういった組織は時間だけ取られて、煩わしくて、面倒な存在になっています。

でも、これがなくなってしまうたらどうなるでしょう、ということをお社会教育委員の皆さんの識見の高さで考えていただきたいというのが私の最後の言葉にしたいなというところです。義務がなくなったという話をしました。それと連動しています。義務がなくなることで世の中の幸せが訪れるのでしょうか。こういった大会は確かに大変です。連携は言葉ほど易しくはない。大会を準備する中で、私たちの使命感やら、やる気やらというものが引き出されていくのだと思うんですね。こういうものをどうやって維持していくのか、そのためには、ただただ金を出してくれという話ではなくて、それをよりよく運営するために知恵や労力が必要です。そういうことを担っている人たちが真面目に考えていくことも必要なのですが、今一つ組織の在り方、社会教育団体いろいろあります。組織の在り方について社会教育委員さんと一緒に考えてよりよいものにしていきたいなと思います。これを最後の言葉にしたいと思います。

相戸 ありがとうございます。約100分間にわたってパネルディスカッションを行って参りました。最後のそれぞれの登壇者の言葉に凝縮されていたように思いますけど、森山会長は、生活文化を豊かにしよう、高めようと、そこに人が集まる、人が呼ぶ社会の風土ができるとい

うお話をされました。綾町の実践を伺って、まさに生活文化を高めるということ、人々の暮らしに根ざした社会教育実践が、いかに重要かということをお教えました。



また、竹内校長先生の最後のまとめでは、子供たちを健やかに育てるためには、一人の人間として、対等な関係、パートナーという関係で、地域や保護者と連携していく必要があるということをお教えました。そこには思いや願いをつむぐという今回の大会テーマにも絡めてお話いただきましたけど、やはり私たち社会教育委員が人一倍、つむいでいく必要があるのかなと思いました。

また、清國先生のまとめでは、社会教育の意義を再確認していただきつつ、一方で社会教育の厳しい政策や実践の動向、だからこそ社会教育委員の存在がより大切になっていることについてお教えました。

冒頭でも申し上げましたように、現代社会における状況の中でますます社会教育の必要性が増しているのではないかと思います。

ただ、残念ながら社会教育の価値というものは多くの人々に共有されているわけではありません。そこで、社会教育のみなさんがこういった社会教育実践の価値をしっかりと理解し、地域の社会教育実践に足を運び、その価値を動き伝えていく、そういった役割が多いに期待されているのではないかなと思います。

今日は私のつたない進行でしたが、登壇者の方々にたくさんのお話を教えることが出来たと思います。フロアのみなさんに一つでもヒントになるお話があれば幸いです。

それでは、以上をもちましてパネルディスカッションを終わらせていただきます。